



貯金箱になった少年

五華内 しびよ

目次

17日目の月（たちまちづき）がむら雲に重なって、ぼんやりとにじんんでいた。

ボクの左目は、勉強机の上から、薄（うす）いカーテン越（ご）しに夜ふけの空をのぞいている。

右目のほうは何も見えなくて、たぶんどこかで裏返（うらがえ）しなんだろう……。

ボクは、陶器（とうぎ）で出来たシロクマの貯金箱（ちょきんばこ）。

ちょうど2年前、ミナト君のパパが、出張（しゅっちょう）で行ったカナダのおみやげ。今は真っ暗なミナト君のこの部屋で、バラバラに割れて見る影（かげ）も無いよ。

どうしてこうなったのか。

それは、ついさっきこんなひどい目にあったから……

「ドシン！」

何？

「ガタッ、ゴソッ」

「スルスル、スル、スルスル」

まだ夜中だよ。

「カチャ。キィーキキ」

今度は、パパとママの寝室（しんしつ）のドアが開く音——間違いないよ。いつも聞こえる音だから。

「パタン」

……だって、この家のみんなは、遠くで暮（く）らす親類（しんるい）に会いに出かけて、もう今日は帰らないはず。

「コタッ。コタッ。コタッ」

それなら誰（だれ）？ 廊下（ろうか）をだんだん近づいて来る！

「カチャッ」

そっとドアが開けられた。すると、暗い廊下（ろうか）の向こうから、ミナト君のこの部屋を、ライトの光が照らし始めた。

暗闇（くらやみ）の中、洋服タンスやベッドの上を、何度も光が尾を引いて行き、影たちはその度（たび）にざわめいた。

部屋の右側をすみの方まで照らした後は、壁（かべ）を伝い、光はミナト君の学習机が置かれた左側へと移動（いどう）して来た。

学習機のそばには、ボクらを並べた棚（たな）もあって、そのうちきつとこちらにも――あっ、まぶしい！

いったい何者？ 光の影に紛（まぎ）れて、そこにいるかどうか分からない。
もしかしてドロボウ？ だって、いつまで経（た）っても部屋の明かりをつけないから。

「コタッ。コタッ。コタッ」

靴（くつ）の硬（かた）い足音が、ボクだけ照らしたままで近づいて来る。
強い光に目がくらむ。

「うっ！」

ボクは突然（とつぜん）つかまれて、体が宙（ちゅう）に浮（う）いた。

「ガシャッ、ガシャッ」

乱暴（らんぼう）にゆさぶられ、中のお金が激（はげ）しく鳴った。

逆さにされたり、ライトを顔におしつけられたり……手荒くあつかわれ、気が遠くなりそうだった。

そのうち、頭からすっぽりとタオルで巻かれて、ボクは勉強机の上に寝（ね）かされた。

——これからどうなるの——

「ガサゴソ」と、バッグの中身を探す音が聴こえる。

「ゴツ！」

えっ？

「ゴツ！」

やめっ！

「ガシャン、ガシャガシャ」

体の上に、何度も硬（かた）い物が下りてきた。そのせいで、お金とそれにボクの体をタオルの中にばらまいた。

ドロボウは、タオルを開いてボクの欠けらをつまんで捨てた。それからタオルを丸めて、中のお金をバッグにつめた。

ファスナーをすべらす音やタオルの中ではねたお金も、耳の破片（はへん）が聞いていたから分かるんだ。

「コタッ。コタッ。コタッ」

靴（くつ）の硬（かた）い足音が、静かに遠ざかって行く。部屋を出て廊下（ろうか）を渡り、階段を何ごとも無かったみたいに下りて行く。

……ボクは、ミナト君から預（あず）かった、大事なお金を盗（ぬす）まれた。

ボクの左目は、勉強机の上から、薄（うす）いカーテン越（ご）しに夜ふけの空をのぞいている。

右目のほうは何も見えなくて、どこかでたぶん裏返（うらがえ）しになっている……。

とても悔（くや）しい気分なのに、どちらの目からも涙（なみだ）は出なかった。それは、ぼくが陶器（とうき）で出来ていたからだけ——いま思い出したんだ。何をされてもしかたない、ぼくがおかした過（あやま）ちのこと。遠い遠いはるか昔。あれは、そう……

ボクが人間で、10歳の少年だったころのこと。

銀と瑠璃（るり）で飾（かざ）られた、それは見事な首飾（くびかざ）りを、お金持ちから盗（ぬす）んで逃げてしまったんだ。

ボクの家は貧（まず）しくて、家族はいつもお腹を空かせていた。

不浄（ふじょう）な仕事にしかありつけず、朝から晩まで働いて、それでもやっと生きて行く毎日。

贅沢（ぜいたく）に暮（く）らす人たちを見て、同じ人間なのにどうしてだろう。ボクは、世の中が不公平（ふこうへい）に思えてしかたなかった。

そんなある日のこと。お金持ちが住む屋敷（やしき）の門が、少しだけ開いているのに気がついた。

ボクは、いけない事だと思いつつそこから中へ忍（しの）び込（こ）み、部屋の奥にかくされていた宝石箱（ほうせきばこ）を見つけだした。

腰（こし）にしるばせたナイフでカギをこわし、中からいちばん輝（かがや）いていた首飾（くびかざ）りをボクは盗（ぬす）み出した。

けれど……お金持ちしか持てない宝物（たからもの）を、10歳の貧（まず）しい子供がどうにもできないよ。盗（ぬす）んだことも直ぐに暴（あば）かれ、ボクは、たくさんの大人たちから、追われることになった。

その日から町中をてんでんと逃げ回ってきたけれど、いよいよ追いつめられて気づけ

ば町はずれ。大河（たいが）が流れる夜ふけの河原（かわら）へ行き着いた。

ボクは土手（どて）を下り、川のようにすを確かめようとしたけれど、あたりは月も星も無い漆黑（しっこく）の闇（やみ）。それならと耳をすませば、虫の音（ね）ひとつしなかった。

手探（つさぐ）りでうろうろしても、たどり着けそうになくて、地平線まで続くあの壮大（そうだい）な眺（なが）めは、どこへ隠（かく）れてしまっただろう……。

家を出て、気になっていたことは家族のこと。弟や妹たちも、家族はきっと袋叩（ふくろたた）きにあっただろう。みんなは、まだ生きているだろうか。

心配しても、あとの祭り。ボクは、河原（かわら）をさまよいながら、渡（わた）ることも戻（もど）ることも出来ずにいた。

「ザザッ」

「アッ！」

水たまりに足をすべらせた。その拍子（ひょうし）に、はいていたサンダルが片ほう脱（ぬ）げて、どうしても見つからない。

暗闇（くらやみ）の中、石や砂をかき分けるけれど、はたしてボクの目は、開いているだろうか。

ふと目の前を、悠々（ゆうゆう）と水の流れる気配がして、すると、揺（ゆ）れながら水面（みなも）を遠ざかるサンダルが見えた気がした。

「闇夜（やみよ）にまぎれて、何かするつもりなのか」

ボクは、姿を暗ましたままの大河（たいが）が、災（わざわい）いを招（まね）きやしないか疑（うたが）った。

この川が大蛇（だいじゃ）になって、ボクを飲みこんでしまう？ それとも、不意に足をすくわれ、地獄（じごく）の底まで連れて行かれてしまうだろうか。

そう思うのは、きっとこの暗闇（くらやみ）のせい。そして、ドロボウをした後ろめ

たさのせいだ。

分かっているけれど……。

ボクは急におじけづき、サンダルのはきはきあきらめて、土手の上まで戻（もど）ることに決めた。

すべり落ちる砂をつかんで四つんばいではいあがる。ところが土手の上から目にしたものは――

やって来る、たくさんの焚松（たいまつ）の火と大人たち。ざわざわと狩（か）り立てるざわめきが、もうすぐそこまで近づいていた。

ボクはとっさにふせたけれど、連れてこられた犬たちが1匹2匹と吠（ほ）えだして、すると影たちがいっせいに放（はな）たれるのを見た。

ボクはあわてて土手を駆（か）け下り、いま来た暗闇（くらやみ）に向かって逃げ出した。

首飾（くびかざ）りを握（にぎ）ったまま、大きな石に足を取られながら。

裸足（はだし）の片方も労（いた）わって、おのずと足もとへ向いた眼差（まなざ）し。しかし、辺りに何やら気配がしてきて、顔を上げたら驚いた。

見えなかった河原（かわら）の景色が、ぼんやりと暗闇（くらやみ）の向こうにうかんでいる。

朝が近づいたからなのか、それとも夜の暗（くら）さになれてきたのかもしれない。

ボクは、あわてて目を凝（こ）らす。

そして、墨絵（すみえ）のような静けさにまぎれた、ボクが目指す場所を探した。

黒く地を這（は）うようにうごめくその場所は――

あったあそこだ！

ボクは、小石をけてまっしぐらにそこを目指す。

犬の狂（くる）ったみたいな鳴き声が、あっという間に近づいてくる。

後ろは振り返らず行く手もためらわず、もう裸足（はだし）だって気にしてはいられない。

このままいっきに大蛇（だいじゃ）のふところへ――

「やあー！」

「パチャパチャ、バシヤバシヤ」

ボクは真っ黒な川底を蹴（け）って、どんどん深みに向かって漕（こ）いで行く。

「もう、どうにでもしろ！」

向こう岸まであまりに遠くて、船を使わず渡る者など見たことが無い。けれどボクには、もう選ぶ道が無い。

腰（こし）にしぶきを跳（は）ねながら振（ふ）り返ると、焚松（たいまつ）の下、犬たちが川に沿って吠（ほ）えだてていた。

すでに大人たちも追いついて、それぞれ何かを叫（さけ）んでいる。

中には川につかった人影もいて、まだ追いかけてくるつもりか。

「だって、川には人食いワニがいるんだぞ。知らない人なんていない」

ボクは、少しでも遠くへ逃げようと、なおも川を漕（こ）いで行く。ヘソが隠（かく）れるくらいの深さになると、水は急に冷たくなって、流れもきつく変わった。

川下へ押されながら、足をすくわれないよう両腕（りょううで）でバランスをとって進む。

どこまで行けば、逃げ切れるだろう。どこまで川底を蹴（け）って進むことが出来るのか。

胸までつかると、思うようには進めなかった。水に押され、ふん張ることも難しい。けれどもボクは、もう1歩と前へ踏（ふ）みだす。

片足を上げて、自分をおし出すように。

すると、体が少し浮（う）いて、すぐまた沈（しず）んだはずが、どちらの足も川底へはとどかなかった。

水面があっという間に喉元（のどもと）を触（さわ）り、息を吸いこむ間も無く頭まで沈（しず）んで行く。

恐怖（きょうふ）におののき手足をばたつかせて、あてもなく水中をものがくばかり。

ボクは泳げない。水に浮く術（すべ）も知らない。

深みにはまり流れに操（あやつ）られ、もはや岸がどちらで、体がどこを向いているかも分からなかった。

「たすけて……」

「……」

「……」

ボクの目は、開いているのか。意識（いしき）は、まだボクの肉体にあるのだろうか……。

思い出すのはここまでのこと。その後の、ボクや首飾（くびかざ）りのことも、ボクは分からない。

インドの、たしか北西部の辺り。すべては、ボクが暮らした町とそばを流れる大河であったできごと。

人間だったボクが、シロクマの貯金箱（ちょきんばこ）に生まれ変わる、遥（はる）か3000年前にはたらいだドロボウの記憶（きおく）。

だから――

ミナト君のお金が盗（ぬす）まれたのは、ボクの責任（せきにん）だよ。ボクが昔（むかし）、首飾（くびかざ）りを盗（ぬす）んだから。

神様の罰（ばつ）さ。

これからも続くだろうか、輪廻転生（りんねてんしょう）……とにかく謝（あやま）るよ、ミナト君ごめんなさい。そして、神様どうかゆるしてください。

今とてもみじめな気分なのに、どちらの目からも涙（なみだ）は出なかった。それは、
ぼくが陶器（とうぎ）で出来ていたからだけ——本当にいま思い出したんだよ。

遠い昔（むかし）の過（あやま）ちのこと。

（終わり）

貯金箱になった少年

著 しびよ

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
